

結婚の神様

櫛木理宇

第四回

5

二次会の会場はホテル・アンジェレノから徒歩五分の角地に建つ、カジュアルなイタリアンレストランであった。

「男性受けのよさそうな、思いつきり可愛らしい格好で」

とのリクエストに応え、咲希は裾に薔薇ばらの刺繍ししゅうが入ったライラックカラーのドレスを選んだ。アクセサリーは同色系のラインストーンとパールを合わせた。

百合香ゆりかのほうはパウダーピンクのウエストリボン付きドレスに、靴やバッグもピンクで統一して一段とラブリーな雰囲気である。さすが己おのれの武器をよく知っている。文句なしの似合いようだ。

披露宴はとくにトラブルもなく終わった。

今回の新婦は、べつだん友達がないわけではないわけではないらしい。テーブルには同僚六人のほか、学生時代の友人十二人が着いていた。

ちなみに後者のうち三人は式のブライズメイドも引き受けており、新婦とはいたって仲良さそうに見えた。余興のフォトムービーにもその三人は頻繁に登場し、「大切な親友」と紹介されていた。

——この新婦に、なんでサクラなんかが必要なのかしら。

そう訝^{いぶか}しむ咲希だったが、謎は宴^{うたげ}の途中で解けた。

席を立てて化粧室に入った際、新婦友人の一人に呼び止められたのだ。

「あの、もし違ったらすみません。……もしかして、チェリーなんとかって会社から派遣された方じゃないですか？」

数秒、咲希はしらばっくれるべきか迷った。

しかし会社名まで知っているあたり、ある程度は事情に通じているのだろう。それに新婦と本心から親しそうな様子を目のあたり^まにしたばかりだ。

もし判断間違いだったら「同名のケーキ屋で働いてるから勘違いしちゃいましたあ」とでも言っただけで誤魔化^{ごまか}そう。そう肚^{はら}を決め、咲希は顎^{あご}を引いてかすかにうなずいた。

目の前の女性がほっと息をつく。

「やっぱり。本日はほんとうにすみません。わたしたちのために」と、あまつさえ頭を下げてくる。

咲希は面食らった。新婦のためなら話はわかるが、「新婦友人のため」とはいったい何ごとだろう。

戸惑いが伝わったのか、

「もしかしてお聞きになっていないんですか」

「あ、はい。そう、ですね」

百合香は聞いているかもしれないが、すくなくとも咲希は知らされていない。

「じつは……」

咲希の顔色をうかがいつつ、新婦友人はためらいがちに語りだした。

彼女が言うには、咲希たちの役目は要するに二次会での『フィードバック』要員なのだという。

新郎の勤め先はとにかく男ばかりで、しかも四十代から五十代の独身がごろごろしているらしい。彼が「学生時代から付き合っている新婦とようやくゴールインする」旨を報告した途端、

「嫁さんの友達を紹介してくれ」

「二次会で出会いの場をセッティングしてくれ」

「期待してるからな。頼んだぞ」

と、その独身の先輩や上司たちに、決死の形相で詰め寄られてしまったのだそうだ。

そこまで聞いた咲希は指で眉間を押さえて、

「ええと、すみません。……御新婦とあなたたちは、見たとこ二十代前半ですよね」

と確認した。眼前の女性がうなづく。

「いま二十三です」

「その高齢独身男性の先輩たちは、新婦の歳をご存じなんではないか」

「新郎と同年ですから、把握はあくしていると思います」

その答えに、思わず咲希は唸うなった。

確かに世の中には若々しく素敵な四十代、五十代の男性も存在する。だがその大半は芸能人もしくは容姿で商売する人びとであって、二十代女性が父親と等しい年齢の男性に恋することはきわめて稀まれだ。いわんや長年彼女がおらず、二次会でがつついていような男性においてをや。

新婦友人が伏し目で言葉を継ぐ。

「……でもですね、新郎にしてみたらやつぱり先輩や上司にあたる方がたですから、そこは無下むげにできないわけですよ」

「でしようね」

「だからとりあえず二次会でフィーリングカップルのイベントを企画して、五組中二組ほどその場でカップル成立させれば、お互いの面目は立つんじゃないかと。でも問題は、誰をその生贄——いけにえ——じゃないくて、カップル要員に仕立てあげるかで……」

「理解しました」

咲希は首肯しゅくごんした。

「そこでわたしたちサクラを頼もうと思いついた、という流れですよね」

「すみません、ほんとすみません」

重ねて彼女が頭を下げる。

咲希は手を振った。

「いえいいんです、お友達の気持ちもわかります。大事な友達を、生贄ひとみごとくだの人身御供になんかしたくないですもんね。……うん、ビジネスライクに解決できるならそれが一番、ってやつですよね」

と、いっぞやも耳にした台詞を繰り返す。

人を騙だますのは正直言って苦手だ。これから会うだろう男性陣に対する罪悪感だって、もちろんある。しかしこの純真そうな女の子たちがセクハラに遭あうやもしれぬ可能性を考えると、やはり事前対策を講じるのが正解かな、と咲希は思った。

だっていくら年齢的に焦っているとはいえ、出会いを部下の伝手ついで

で、しかもごり押しで迫るような人物では不安しいではないか。

咲希は覚悟を決め、

「大丈夫、おまかせください」

と真顔で請け合った。

——というわけで、二次会に来たはいいけれど。

ようやく到着した新郎新婦は友人たちに挨拶あいさつまわりの最中だ。余興はまだはじまっていない。司会も演台に立ってはいない。

咲希はワイングラスを片手に、対角線上の一団を横目でうかがった。

三十代後半から五十代とおぼしきスーツ姿の男性群が、こちらをちら見しては額を突きあわせて小声で話しこんでいる。

年頃や風体からして、事前に聞かされていた「例の上司たち」で間違いないだろう。

品定めされてるなあ、と咲希は内心でひとりごちた。

べつにいいけれど、もうちょつとさりげなくやっつてはくれまいか。視線に気づかぬふりをするほうだって、それなりに大変なのだ。

あのあと化粧室での新婦友人との会話を百合香に報告したところ、彼女が蔵野くらのに連絡をとってくれた。

蔵野いわく、「断られると困るから、二次会の直前まで隠しておく

つもりだった」そうだ。いけしやあしやあと、と咲希は呆れた。しかし百合香は苦笑しただけで、

「ま、なんとかなるでしょ。要するに面子メンツの中で、比較的偉い人の顔を立てて終わればいいのよね？」

と涼しい顔であった。

——まあいいや。ひとまず時間があるうちに食べておくとするか。

咲希は百合香に目で合図し、ビュッフエコーナーへ向かった。

陶製の四角い盛り皿にはトマトソースのペンネにアンチョビのピッツア。シーザーサラダに鳥賊いかのフリットなどイタリ안의定番と言えるメニューが並んでいる。

咲希がトングに手を伸ばす。しかしその寸前、一人の男性が彼女の前へと強引に割りこんできた。

紺の三つ揃いスーツに銀縁眼鏡、細いストライプのネクタイと、いかにも真面目そうな風体だ。歳の頃は四十代なかばだろうか。

男の手が、トングをぐいと掴つかみとる。咲希には「失礼」の一言もない。

なぜか男はフリットを皿に取ったあとも、トングを所定の位置へ戻さず持ったまま歩きはじめた。

料理を山盛りに取っては、数歩進んでから思いなおし、取ったものをごっそり戻す。手にしていたトングをまったく別の盛り皿へ突

っ込んでいく。そして新たなトングを掴んでは、また同じ所作を繰り返かえず。

マナー悪いなあ、と咲希は呆れた。

彼女が思うに、女性一般が真つ先に敬遠するのは「食事の席でマナーがなっていない男性」だ。ぺちや。ぺちや音をたてて食べるのだの、握り箸やねぶり箸をやらかすだの、はたまた店員に対して横柄おうへいだったりしたら百年の恋も冷めてしまう。

——その点、シロちゃんは食べかたも箸の持ちかたもきれいだもんね。

想い人の顔を思い浮かべ、咲希はなんとか気を取りなおした。

パスタやピッツアなど、腹持ちのよさそうな炭水化物を中心に選んで持ち帰る。

「美味おいしそう。あたしにもすこし分けて」

と出迎えた百合香は、相変わらず涼しい顔でワインをぐいぐい空けていた。

「大変お待たせいたしましたー！ 新郎新婦がとつくに到着しているのに今さらですが、これより二次会を始めさせていただきますー！ 本日は皆様、お忙しい中ありがとうございますー！」

新郎の学生時代の友人だという司会が、テンション高く場を仕切

りは始める。

時刻はすでに九時をまわっていた。遅ればせながらの新郎新婦の挨拶があり、乾杯の音頭が為なされる。

最初の企画はビンゴゲームだった。三等の商品は空気清浄機、二等はデジタルカメラ。そして一等『デイズニールゾートのペアチケツト』を当てた女性が、

「では本日の主役のお二人に」

と譲るといってお決まりの流れを経たのちに、ようやく今夜のメイニンイベントがはじまった。

言わずと知れた、くだんの『フィーリングカップル5対5』である。

男性陣は新郎の勤務先の係長、主任、そして先輩社員三人。

女性陣は百合香、咲希、そして本物の新婦友人三人というメンバーであった。

だがこの新婦友人たちは、顔ぶれに真実味を持たせるためだけの参加であるらしい。その証拠に、全員が咲希と百合香に目で訴えている。「頼みますよ」、「信じてます」と、必死に表情で哀願している。彼女たちにさりげなくうなずきかえして、咲希は男性陣を見まわした。

途端に「げっ」と言いそうになる。

——やだなあ、さっきのトング男じゃない。

しかも新郎の課の主任だそうで、そこそこ偉いのがまた厄介だ。

その隣に座る係長とやらは五十歳前後に見えた。かなり額が後退しており、ネクタイに披露宴で出たピストソースらしき染みが飛び散っている。眼鏡のレンズには、こまかいフケが大量に付着していた。

残る三人は萎縮しているのか緊張しているのか、おとなしそうな男性たちである。主任と同年代か、もしくは二、三歳下だろう。

「引き続き、司会はわたくしが務めさせていただきます！ まずは第一印象でいいなと思った人を、こちらのカードにお書きください！」

配られたカードに、咲希は適当に「三番」と書いておいた。

実際、三番の男性は彼女から見て可もなく不可もなくであった。濃鼠のスーツに、ホワイトシルバーの水玉のネクタイ。咲希よりやや背が低そうで、体重は二十キロほど重そうだ。胸の名札には丸っこい字で『井波』と記されている。

「では早速ですが、質問タイム！ 最初はお互い緊張しているでしょうから、第一問は司会から出させていただきますね。『好みのタイプの有名人は？』。はい、男性の一番からお答えください！」

男性五人はそれぞれ流行りのアイドルや若い女優を挙げた。

百合香ははにかみながら、

「ちよつと古くてすみません。マルチェロ・マストロヤンニ」と言
った。

咲希は迷った末、「ジャンボ鶴田」と正直に答えた。

残る女性二人は、それぞれドラマなどで有名な若手俳優の名を挙
げた。

「お次は女性から男性への質問をお願いしますよう。一番の、えー
と……澤石さわいしさんですか。いやあ、お美しい。こんな綺麗な方がフリ
ーだなんて信じられないなあ。澤石さん、なにか男性陣に訊いてみ
たい質問はありますか？」

でれつと鼻の下を伸ばす司会に、百合香は艶然えんぜんと微笑ほほえんだ。

「そうですね、じゃあ『女性に初めて会ったとき、どんなところを
真まっ先に見ちやいますか？』——なんて」

語尾に茶目ぢめつ気を滲にじませ、首をすくめる。

司会がさらに顔筋を弛緩しかんさせ、

「だそうです！ では男性陣、お答えください。初対面の女性の、
どこをまず見ちやいますか？」

係長は「胸」と堂々と答えた。主任は「顔」と答えた。井波は「眼
を見ます」と言い、ほか二人もそれに追従ついでするかのように「眼」と
回答した。

質問はさらにつづいた。

女性たちからは、

「定番のデートコースを教えてください」

「最近ハマっていることはなんですか？」

などの質問が飛び、男性からは、

「得意料理はなんですか？」

「将来、子供は何人欲しいですか？」

「男性のどんな仕草にドキッとしますか？」

との質問が発せられた。

男性人気ははっきりと百合香に集中していた。司会さえもが百合香のみを特別扱いし、あからさまにやにさがっていた。

当の百合香はあくまで上品かつ愛想よく、

「その歳で？　ってよく驚かれるんですけど、和食が得意です」

「二人かな。でも授かりものですから何人でも」

「仕事に取り組んでいるときの真剣なまなざしに惹かれますね」

と微笑みを絶やさず答えた。

傍で眺めている咲希は「さすがだ」と息を呑んで見守るしかなかつた。

この調子で百合香一人に五人の男が殺到するならば、どう頑張ってもカップルは一組しか成立しないことになる。つまり新婦友人た

ちは誰も犠牲ぎせいにならずに済むのだ。

新婦友人三人は百合香に賛嘆の視線を送っていた。咲希は「いいぞ百合ちゃん、もつとやれ」と内心で拳を振りあげ応援した。

だが微笑ましく思っていていられるのもここまでだった。後半にかけて男性から女性への性的な質問が増えるにつれ、すこしずつ場の空気が変わっていった。

「独占欲は強いですか？」

「浮気は許せるほうですか？」

程度ならまだしも、

「男性経験は何人？」

「AVとか観ますか？」

とエスカレートしたあたりで会場にはどん引きの空気が漂いはじめた。ついには「風俗通いに理解ありますか？」との質問まで飛び出し、慌てて司会が、

「レフェリーストップ！」

と割って入る事態となった。

ちなみにこの手の質問をにやにやと連発していたのは、係長と主任の両名であった。

数分の打ち合わせ時間をあけ、やがて司会がマイクを握りなおした。

「さて質問も出揃いました！ 皆さん、お気に入りの相手は見つかりましたでしょうか？ ではその方の番号をカードに書いて、こちらのボックスへお入れください！」

咲希は最初と同じく「三番」と書いてボックスへ投函した。しばし「確認タイム」が設けられたのち、結果発表となる。

「それでは発表いたします」

司会の男がもったいぶった間をあげ、叫んだ。

「なんと今宵は、めでたく二組のカップルが誕生いたしました！」

まずは男性二番の戸田主任と、女性一番の澤石さん！」

トング男と百合香が、周囲の拍手を浴びて立ちあがった。

あれ、と咲希は手を叩きつつも困惑した。

てつきり男性全員が百合香を指名すると思っていたのに、番狂わせが生じてしまった。

司会が二人へマイクを突きつけて、

「いやあ、ぼくの澤石さんが奪われてしまいましたか、悔しいなあ。

——という具合に澤石さんは終始圧倒的人気だったわけですが、そんな美女を射止められた戸田主任、ご感想をどうぞ」

「なんというか、うーん、最高の夜です」

「ありがとうございます。では澤石さん、ご感想を」

「たいへん光栄です。だけど、なんだか照れちゃいますね」

司会の勧めに従って、二人はスマホの電話番号とIDを衆人環視の中で交換した。

むろん百合香のスマホは蔵野から支給されたダミーである。胸を反らして得意満面の戸田に、咲希のほうがいたたまれぬ思いであた。司会がマイクを持ちなおして叫ぶ。

「ではつづいて二組目をご紹介します。男性三番の井波さんと、女性二番の合路さん！ いやータイプは違えど、こちらもすばらしい美女ですね。さあどうぞ、拍手に応えてお立ちください！」

6

二次会が終わってすぐ、咲希と百合香はそれぞれカップルが成立した相手に「どうですか、三次会に」と誘われた。

咲希はてつきり、百合香がうまく断ってくれるものと思った。それに便乗して自分も帰るつもりであった。

しかし、「いいですよ。素敵なお店、ご存じですか？」とすぐ横で百合香に微笑まれ、断る名目とタイミングを逸してしまった。

しようにことなしに会場前で二手に分かれる。

「電車の都合があるので、じゃあ駅に近い場所です」と、井波とともに目についた居酒屋へ入った。

だが席について五分と経たぬうち、咲希のスマホが鳴った。百合香からのLINEだ。早くも戸田主任をまいたというメッセージであった。

——まいったな。わたしにはそんな芸当、とても無理だわ。

お通しが運ばれてくる。おしぼりが渡される。

店に入ってしまったし、いまさらまくなんで真似はできない。かといって顔を突きあわせたこの状態で、嘘をつきつづける自信もありはしない。

「あ、わたし生中で」

「ぼくも同じの」

店員が注文を復唱し、背中を向けて去る。もう肚を決めるほかなかった。咲希は観念し、井波に向かって深ぶかと頭を下げた。

「——すみません。あのですね、じつは……」

わたくしサクラなんです、と告白された井波は、意外なことに怒るどころか驚きもしなかった。

「そんなこったろうと思いましたよ。このぼくがあなたみたいな美人とカップル成立なんて、リアリティがなさすぎますからね」

とわずかに苦笑しただけであった。

「す、すみません……」

「いえ、いいんです。べつに責める気はありません」

井波はお通しの切り干し大根を箸でつまんで、

「それより、もしよろしければ電車の時間まで相談にのってほしいんですが、いいですか。お恥ずかしい話ですが、男ばかりの職場なこともあって女性の意見を身近で聞ける機会がなかなかないんです」と遠慮がちに言った。

咲希はおっかなびつくり問いかえした。

「そ、相談、と言いますと——」

「ええ。じつはぼく最近、婚活というやつをはじめまして」

ビールのジョッキが届いた。いまのうちにと、咲希は自家製薩摩揚げとモツ煮、冷やしトマトを注文した。

井波がビールで舌を湿し、言葉を継ぐ。

「結婚相談所に登録したり、お見合いパーティに出席したりと、自分なりに頑張ってるつもりなんです。でも成果がかんばしくないと
いうか、その……出会えた女性と、いい感じになれたことがなくて」
「いい感じに……って、つまり交際までいたらない、ということですか」

「それどころか、まず会話からして弾まないんです」

彼は沈鬱ちんうつな面持ちでうつむいた。

「一応事前にテレビや雑誌を見て、女性の好きそうな話題を仕入れ

て行くんですよ。でもいつも、いまひとつ噛み合わないんです」

「好きそうな話題とは、たとえば？」

「ええと、『いま東京じゃこんなデザートが流行ってるらしいですね』とか、『こういう映画が流行ってますね』なんて切り出したりします。すると向こうも『そうみたいです』、『テレビで観ました』と言ってくれますが、それ以上話が広がらないというか、会話が途切れちゃって」

「え、そこは相手の反応を見て、好感触だったら『じゃあ今度一緒に行きましょう』と誘う場面じゃないんですか」

「いやあ、その「反応を見て」っていうのがどうも苦手で……」

井波はもごもご言い、モツ煮の汁を啜すすった。

咲希はちよつと身を乗り出して、

「失礼ですが、身近に親しい女性はいらっしやいますか」

「いえ、彼女いない歴イコール年齢です」

寂しげに答える井波に、咲希は手を振った。

「そうじゃなくて女友達とか、女のきょうだいはい？」

「いません。友達は全員同性ですし、それだってお世辞にも多いとは……。一人っ子で、親戚も少ないほうです」

「ではもつと失礼なことを訊いてよろしいでしょうか。——女性を本気で好きになった経験はありますか」

「ないです、ね」

井波はビールを呷った。

「なにしろ、好きになれるほど近い間柄の女性がいませんでしたから。初恋は幼稚園の先生でしたが、それ以降は全然です」

「そうですね。ちなみにわたしも彼氏いない歴イコール年齢です」
きつぱりと咲希は断言した。

井波が意外そうに瞠目する。しかし彼がなにか言う前に咲希は手で制して、

「でも本気で好きな男性はいます。というか、いまでも初恋を継続中です」

とさらに言い切った。

「失礼を重ねて恐縮ですが、井波さんは好きな人がいないのに、なぜ結婚したいと思われるんですか」

「……まだ若いあなたにはわからないかもしれませんがね」

井波は嘆息した。

「ぼくはね、もう四十三歳なんですよ。いつまでも独身だと周囲の目が」

彼は空になったジョッキを押しやり、店員を呼んで冷酒を追加注文した。

「両親だって七十近いんです。そろそろ楽をさせてやりたいし、介

護問題だつて迫っています。でもなにより一番不安なのは、自分自身の老後です」

井波は眉を下げて、

「——孤独死だけは避けたいんですよ」

と呻くように言った。

それから電車出発時刻までの約三十分間、井波は冷酒を次つぎと空けて乱れていった。さすがに咲希に絡んでくるようなことはなかったが、唇からは愚痴がとめどなくこぼれ落ちた。

「世の女性つてのは、どうしてああ見る目がないんでしょう」

「ぼくより収入の低いギャンブル好きのろくでなしに、尽くすタイプのできた嫁さんがくつついているのを見ると心底がっかりします。なんであんな男が結婚できて、真面目に働いているぼくにはできないのか、と」

「見合いも何度かしたんですよ。でもぼくを愛して、心底尽くしてくれる女性には出会えないままです。ぼくの運命の相手は、いったいどこにいるのか……」

そりや恋愛とお見合いじゃわけが違うわ、と咲希は思った。

だが口には出さず、ただ黙々と食べて飲み、たまに相槌を打った。

尽くすタイプの女というのは、相手に惚れているからこそ尽くす

のよ。お見合いはまずお互いの条件のすり合わせからだもの。条件が合うというだけの、惚れてもない男にいきなり尽くせる女はそういうないわよ。

やがて井波はカウンターに突つ伏し、低いびきをかきはじめた。咲希は伝票を持つてかがみこみ、聞こえてはいないと承知で彼にささやいた。

「……そろそろ電車が来るので、わたしはこれで」
レジで全額精算し、店を一步出た途端に長いため息が洩れた。

——孤独死だけは避けたいんですよ。

井波の呻きが、脳内でいまだ反響していた。

7

青扇殿せいおうでんの能舞台は、数十匹とじゆびの錦鯉にしんぎが泳ぐ澄んだ池へと大きくせり出している。

その能舞台と、中庭の景色とをガラス越しに望める『常盤の間』
で、いまでも式は行われようとしていた。

ただし結婚式ではない。畳に緋毛氈ひもうせんが敷かれ、高砂たかさごの脇わきに菰樽こもたるが用意されたその会場には、

『橋川忠勝様・淳子様 祝！ 離婚式』

の文字が横断幕に華々しく躍っていた。

式というべきか披露宴というべきか、『鶴』、『亀』、『福』、『禄』と札が立ったテーブルには色あざやかな生花が飾られていた。招待客各々の席にはすでにコップやおしぼりが整然と並んでいる。

「華やかかつ、落ちついたドレスで」

と事前に蔵野から指定されていた咲希は、ゴールドの身頃に透けシフォンを重ねたタイトなシルエットのドレスを。百合香は裾丈がアシンメトリーなブルーグレイのドレスをチョイスしていた。だがはっきり言って、二人とも浮いている。

集められたのは新郎新婦——いや、橋川御夫婦の親戚や近隣住民が主らしかった。

咲希と百合香は親族席に座らされていた。どうしても今日のこの場に来ることを嫌がった、橋川夫妻の実娘たちの代役なのだ。本物の娘たちの顔を知っているのだろう招待客が、怪訝けげんそうな顔でこちらをちらちらとうかがっている。

高砂の橋川夫妻はどちらも六十代に見えた。

付け下げの着物をまとった細君はいたって上機嫌だった。その横にいる旦那はダークスーツで、なんともいえぬ複雑な表情をして座りこんでいる。

一見、どこにでもいそうな初老の夫婦であった。

薄くなった髪を精一杯撫でつけたビール腹の旦那。俗称おばさんパーマをかけ、首と顔の色がまるきり異なるメイクを押しとおす妻。洗練されてはいないにしろ、日本各地でよく見るごく平凡な組み合わせと言えるだろう。

おもむろに、妻がマイクを持って立ちあがった。

「えー、本日は皆さん、わたくしどものためにお忙しい中ありがとうございます。これより、わたくしと夫の離婚式をはじめさせていただきます」

彼女は微笑みながら会場を見まわし、

「思い起こせば三十年前から、わたくしは夫に離婚を申し入れておりました。たび重なる彼の浮気、借金。きつい姑しゅうとめの嫁いびりを訴えても一度たりとも守ってくれず、ろくに家計に生活費を入れることもなく、競馬だ競輪だと遊びまわる夫。飲み歩いては女を口説き、貢ぎ、わたしに姑の世話と舅しゅうとの介護を押しつけた夫。そんな彼に、ほとほと愛想が尽きたからであります」

滔々たうたうと並べたてた。

「しかし三十年前はまだまだ、女の側からは離婚しづらい風潮でした。まだ娘たちが幼いことも、介護に迫われて働けず経済基盤がないことも不安でした。娘たちが成人するまでの我慢と己に言い聞かせ、舅の介護が終わったなら今度こそ働こうと思っておりましたが、

折悪しく鼻を看取った直後に、今度は姑が倒れ——。ようやくパー
トに出られるようになったときには、わたくしは五十を過ぎていま
した」

思い入れをこめて言葉を切る。

「そこから五年かけて、なんとか弁護士を頼めるだけのお金を貯め
ました。なのに夫は、この期じに及んでまだわたくしを苦しめました。
離婚に同意してくれなかったのです」

彼女はまぶたを伏せた。

「気持ちにはわからないでもありません。彼も定年を目前にして、家
事いっさいを請け負う飯炊き女を手放すのは得策でないと思ったの
でしょう。こちらも過去の浮気や借金を盾に調停へ持ちこみました
が、残念ながら離婚交渉は、遅々として進みませんでした」

といったん落とした声を、

「しかし今年になって、事態は好転したのです！」

妻は高らかに張りあげた。

「数年ぶりに、夫に彼女ができました！ お相手はあちらにおられ
る、クラブ『モンシエリ』のホステス、樹里亜じゅりあさんです！ 皆さん、
感謝をこめて彼女に盛大な拍手を！」

妻が手で示した方向には、四十代なかばの女が座っていた。いき
なり注目を浴び、居心地悪そうにうつむいている。

妻は満面の笑みをたたえ、

「樹里亜さんという存在ができた夫は、ようやく離婚届にサインしてくれました。また慰謝料を免除する代わり、最後の最後にわたくしの好きなようにさせてくれると、念書も書いてくれました。そうして最後にわたくしがどうしてもやりたかったのが——この離婚式でございます」

と言いはなった。

「四十七年前にわたくしどもが夫婦になったとき、『金の無駄だ』との舅姑の大反対により、わたくしは花嫁衣装を着られませんでした。思えばこの屈辱くつじよくの結婚生活は、その瞬間からはじまっていたのだと思います。さすがにもう白無垢しろむくを着る歳ではございません。でも長い夫婦生活の総決算として、わたくしはどうしても式を挙げてみたかった」

スタッフが菰樽のまわりに集まってきた。

「これはわたくしなりの、最後のけじめです。誰にわかってもらえなくともかまいません。これからは孤独に、けれど自由に、誰に気を遣うことなく今度こそ自分のために生きていきます」

妻はにこやかにそう宣言した。

その手へスタッフが、鏡割り用だろりボン付ききづちの木槌を渡す。

「わたくしも齡六十よむいをすでに過ぎました。でも平均寿命まであと二

十年。人生を取り戻すのに遅すぎることはないと信じております」

誘導され、彼女は樽酒の前に立った。

「では皆さん、御起立をお願いいたします。万歳三唱を行います。

御唱和ください。はい、ばんざーい！ ばんざーい！ ばんざーい！」

ばんざーい、と咲希たちもつられて唱和した。

細君が木槌を孤樽へ振りおろす。

見事に一撃で蓋ふたが割られた。

咲希は自然と拍手をしていた。べつにめでたいと思っっているわけではない。だが日本人として、この光景を見ると条件反射的に手を叩いてしまうのだ。

他の客たちも同じ思いらしく、皆、呆然とした表情のまま拍手していた。

夫は上機嫌な妻の横でひたすら渋い顔をしている。恋人だというホステスにいたっては顔が上げられないらしく、身を縮めて座っているきりだ。

「——まあ夫婦の締めくくりとしちや、これもまた良しなんじやな

い

百合香が低く言って、ひのきます 桜升の酒を干した。

九月に入っても厳しい残暑はつづいた。

その日は咲希、百合香ともに結婚式のみの参列で、との依頼であった。しかも蔵野からはあらかじめ、

「新婦だけで、新郎は参加しない式だから」

と知らされていた。

普通なら新郎が急病で欠席だろうか、とでも考えるところだが、それならサクラを雇うはずもあるまい。

——まさかシロちゃんのお友達みたいに、脳内恋人と挙式だとか？

戦々恐々として咲希は式場へ足を踏み入れた。

ホテル・アンジェレノのチャペルはゴシック建築を模しており、ずらりと並んだ尖塔せんとうアーチに高い天井、飛び梁はりが特徴的だ。

スタンドグラスで花びらを放射状にかたちづくった『蕃薇窓』が、天辺からチャペルへ淡い光を投げ落としている。

正面の祭壇には十字架が輝き、燭台しよくだいではキャンドルの火が揺れていた。祭壇の装花もチェアフラワーもリボンも、清楚な白で統一されている。バージンロードに敷かれた布も白であるからして、きつ

とプロテストメント式なのだろう。

咲希と百合香はベンチに腰かけ、式がはじまるのを待った。

やがて、オルガンがパツヘルベルのカノンを奏ではじめた。

幼いフラワーガールが、花籠から花を撒きながらバージンロードを歩いていく。結婚指輪を捧げ持ったリングボーイがそのあとにつづく。蔵野によればどちらも劇団の子役だそうだ。なるほど二人とも整った容姿で、やけに堂々としている。

ウエディングドレスの新婦が入場してきた。

彼女を見た瞬間、咲希は不覚にもぎよっとした。

新婦と腕を組んで入ってくる父親の姿はない。新婦は一人きりだった——が、完全に一人というわけでもなかった。

彼女は胸に、新郎らしき男の写真を抱いていた。

——遺影？

目を凝らしてみても、いや違う、とわかった。

写真を入れた額縁は黒枠ではなく、黒リボンもかかってはいない。

金縁の枠内で、二十代後半に見える男が屈託のない笑みを見せている。

——でもあの顔、どっかで見たような。

そう訝ったとき、隣の百合香が「やだ」と小声でつぶやくのが聞こえた。

「どうしたの？」

同じく小声でささやきかえす。

耳もとへ百合香が口を寄せてきた。

「あの写真の男、五、六年前にワイドショーでさんざん見た顔よ。

覚えてない？ 『茜通り無差別殺傷事件』って」

咲希は息を呑んだ。

そうだ。言われて見れば確かに、当時ワイドショーやニュースで毎日のように見た顔だ。そして『茜通り無差別殺傷事件』といえば、白昼に無職の男が繁華街に躍り出、子供を含む十数人に刃物を振るって四人を死にいたらしめた大事件である。

百合香が嘆息した。

「蔵野さんから獄中結婚の挙式だとは聞いてたけど、そっかあ、よりによって相手は殺人犯か……。俗に言うプリズングルーピーかしらね」

「プリズン——？ なにそれ」

「収監中の犯罪者にラブレターを送ったり、熱心に面会に通ったりとファン活動にいそしむ人たちのこと。中にはこんなふう囚人を射止めて獄中結婚する人もいるのよ」

百合香の声は平板だった。

「有名な死刑囚なんかだと、支援者が面会の権利を得るために偽装

で籍を入れるケースもあるそうよ。でもこの新婦は挙式までするんだから、どうやらガチっばいね」

「……あの事件って、もう判決は出たんだっけ」

咲希は低く問うた。そう訊くのが精一杯だった。

「くわしく知らないけど地裁は出たんじゃない？ 四人殺しておいて、まさか無期懲役止まりは有り得ないでしょう」

ということは極刑か。咲希の気分は重く沈んだ。

そんな彼女をよそに、祭壇前の牧師は聖書を広げ『コリントの信徒への手紙』の一説を読みあげはじめた。

「愛は忍耐強い。愛は情け深い。妬ねたまない。愛は自慢せず、驕おごらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。愛は決して滅びない——」

つづいて牧師は新婦に問うた。

「神の導きに従って妻の分を果たし、健やかなるときも病めるときも、富めるときも貧しきときも、死が二人を分かつまで、夫に貞節を守ることを誓いますか？」

「誓います」

新婦はおごそかに答えた。

そして左手薬指に自分で指輪をはめ、結婚証書に二人ぶんの名を

署名した。

突如、新婦が参列者たちを振りかえった。

「本日お集まりくださった皆様、わたしと善人よしとさんの結婚式に御参加いただき、まことにありがとうございます！」

マイクを使わぬ肉声がチャペルに響きわたる。

呆気にとられながら、そういえば例の犯人は佐藤だか伊藤善人といったつけ、と咲希は思いかえした。無差別殺傷事件を起こした男が「善人」だなんて皮肉だ、と感じた記憶がぼんやりとだがある。

ヴェールを上げた新婦は四十代なかばに見えた。彼女は金縁の額を胸に抱きしめ、

「思い起こせばわたしが善人さんをはじめて見たのは五年前、自宅のテレビを通してでした。事件前は二面識もなかったわたしたちを、衛星の電波が繋いでくれたのです。わたしはその番組で、彼の恵まれない生い立ちを知りました。まさに雷に打たれたような衝撃でした……」

と目を潤ませた。

「その日からわたしは彼に手紙を書き、送りつづける毎日でした。やがて彼からも返事が届くようになり、二年の文通の末、彼のいる拘置所へ面会に赴くことを決めました。そうしてわたしは善人さんと、アクリル板越しにはじめて顔を合わせ——その瞬間悟ったので

す。わたしには彼しか、彼にはわたししかいないのだと」

熱をこめて新婦は語った。

彼女が言うには、佐藤もしくは伊藤善人は、実母の内縁の夫に虐待されて育つたのだそうだ。

その男は無職の飲んだくれで、食らい酔っては気まぐれに彼を殴った。母を夜の店で働かせている間に、彼に対し性的虐待まではたらいだ。内縁の夫が母を捨てて出て行くまで、凄惨な虐待は連綿とつづいた。

「じつは、わたしもなんです」

新婦は涙声でうつむいた。

「わたしの親も、離婚していて……母は、わたしが小学生のとき、再婚しました。それからはずっと、養父と暮らす日々で……。わ、わたしはさいわい、善人さんと違って殴られたり、いやらしいことはされませんでした……養父は短気で言葉のきつい人で、母と二人、父の顔をうかがってばかりの毎日でした」

善人さんはわたし、わたしは善人さんなんです——と新婦は言っ

た。「もしかしたら、わたしがなっていたかもしれない、有り得たかもしれない未来のわたしです。そう思ったら、放っておけなかった。

彼はわたしで、わたしは彼です。わたしだって十代の頃、『みんな死

ねばいい』といつも思っていた。何度も自殺しようと考えた。でも、できなかった。彼はわたしの衝動と妄想を現実にした、もう一人のわたしなんです」

気づけば新婦は滂沱ほうたの涙を流していた。

チャペル内はしわぶき一つなく静まりかえっている。

新婦は涙を拭くと、微笑して聴衆をぐるりと見まわした。

「結婚とは人生を、苦楽をともにすることです。わたくしは彼となら、すべてをともにできると思いました。——だってわたしたちは二人で一人、一心同体なんですから。本日は皆様、わたしたちの門出のためにありがとうございます！」

職務に忠実なサクラと劇団員が、彼女へ拍手を送った。

だが咲希は彼らと一緒に手を叩く気にはなれなかった。チャペルを出て一人でフラワーシャワーを浴びる新婦の背を、暗澹あんたんたる思いで見送った。

「……知ってる？ 伊藤善人ってさ、茜通りの殺傷事件が初犯じゃないのよね」

百合香が低く言った。

「はじめての犯行は中学生のときで、近所の独身女性の家に押し入ったの強盗強姦殺人。奪ったのはたった数万円だったらしいわ。女性を乱暴した上、それっぽっちの現金のために包丁めったで滅多刺しにし

て殺したのよ。でも未成年だったから重い罪にはならず、精神鑑定の結果、医療少年院に収監された。……そして少年院を出て一年足らずで起こしたのが、あの無差別殺傷事件」

感情のない声音だった。

咲希の背すじを、冷たいものが駆けのぼった。

「それをあの新婦は知ってる、のよね？」

「知らないはずはないから、意図的に話すのを省いたんじゃないかな」

百合香は肩をすくめた。

「まあ彼女にしてみたら、伊藤は一生アクリル板の向こうから出てくる恐れのない、自分の幻想を投影するのに格好の相手なんですよ。でも被害者遺族にしてみたら、苦々しいなんでもんじゃないわ

よね」

咲希は慄然りっぜんとして、いま一度新婦の背を眺めた。

いまだつづくフラワーシャワーを浴びて、彼女は笑い声すらあげている。

「……こういうのも、『恋愛』と呼べるのかしら」

咲希が低くつぶやく。

百合香が応じた。

「恋愛は脳内麻薬と思いきみの産物であるという観点のつとに則ったな

ら、立派すぎるほど立派な恋愛結婚でしょ。まあ、そういう意味では一〇〇パーセント彼らを否定しきれない人間なんていないんじゃない？ 誰だってある程度冷静になれば、『自分の恋愛も脳内麻薬が分泌した結果だった』と同意するはずよ」

なんともシニカルな台詞だ。

咲希は否とも応とも言えなかった。ただ声もなく、立ちつくしていた。

恋愛は脳内麻薬と思いきみの産物。確かにそうかもしれない。

だがこの場合、なぜ結婚までせねばならないのか、咲希にはよくわからない。

——人生を、苦楽をともにしたいから？

——二人で一人？ 一心同体？

ワイドショーの報道を通じて、自分とほんの少し生い立ちが似ていたと知っただけで、そこまで言い切れる理由はなんだろう。

それこそ脳内麻薬の産物か。その根底にある感情はなんなのか。

同情？ 共感？ あるいは彼女自身が十代のとき果たせなかった、破壊衝動を表へ吐き出しおおせた者への憧憬？^{しょうけい} だとしたら、そんな感情で結婚にまで至れるもの？

——駄目だ、わたしには理解しきれそうにない。

じくじくと痛みはじめたこめかみを、咲希は指で強く押さえた。

青扇殿が誇る六千坪の庭園は来る紅葉の気配を迎えて、いつそうその緑を冴えさせていた。

中庭での神前式に備え、咲希は白布を張った胡床こしよつに百合香と並んで座っている。

緋毛氈が陽光を照りかえして目に痛いほどだ。八脚案には三宝さんぼうや盃さかずきが用意され、あとは齋主さいしゆと新郎新婦を待つばかりといった空気である。

しかし、いくら待っても式がはじまる様子はなかった。

咲希はクラッチバッグからハンカチを出し、額に滲んできた汗を押さえた。暑い。先月のガーデンウエディングほどではないが、いつまでも無為に待っているのはいささかつらい気温だ。

さいわいビーチパラソル並みに大きな朱傘で、直射日光はさえぎられている。風も多少ある。それでも一刻も早くはじまって欲しいという思いに変わりはなかった。親戚らしき年配の男女が、しきりに手で顔を扇いでいる。

「またなにかトラブルかな」

咲希は百合香にささやいた。

「有り得るわね。そもそもこの結婚式も、新婦が身内の大反対を押
し切って挙げるかたらしいし」

「結婚に反対されてたの？　じゃあ新郎が無職とか、とんでもな
いろくでなしだとか？　まさかまた犯罪者じゃないわよね」

「ううん、新郎に問題があるわけじゃないみたい。というか結婚そ
のものより、結婚“式”のほうをより反対されていたようなの。そ
の反対意見に新婦が直前まで振りまわされまくって、招待客が充分
に確保できなかったとかなんとか」

「それはそれで悲劇ね」

咲希は眉をひそめて、

「でもその身内とやらは、なんで式を挙げさせたくないのかしら。

最終的に青扇殿を選んだくらいだから、費用の問題じゃなさそうよ

ね」

「ん。あたしもまあ、聞いた話でしかないんだけど……」

と百合香が言いかけたとき、会館のほうから複数の声が響いてき
た。

女の声だ。なにやら言い争っている。しかも、次第に近づいてき
ている。

若い女が一人、泣きながら芝を駆けてくるのが見えた。白無垢で
はない。ジーンズにカットソーで、おまけに裸足はだしであった。

そのあとを新郎らしき紋付袴もんつきはかまの男と、留袖とめぞでの中年女が泡を食って追いかけている。さらに数メートル遅れて、礼服姿の中年男が所在なさそうに歩いてくる。

「待って、待ちなさい、真結まゆちゃん」

留袖の女が、ジーンズの女を捕まえた。

しかしその腕はすぐに振りはらわれた。

「離してよ！ 触らないで！」

真結と呼ばれた女が泣きわめく。

「触らないでとはなによ。お母さんに向かってなんて口を利きくの」

「あなたなんかお母さんじゃない！ 帰ってよ、わたしはこの格好のまままで挙式してみせるから、あなたは帰って！」

「なんてことを言うの。恥を知りなさ——」

「真結さんのおっしゃるとおりですよ。黙ってお祝いできないのなら、この場から去ってくださいな」

硬い声がさえぎった。同じく留袖を着込んだ初老の女が、白無垢を腕に掛けて歩いてくる。

「母さん」

新郎が彼女を振りかえった。

どうやらこの女は新郎の母親らしい。腕に携えている白無垢は、墨汁のような液体でべったりと汚されていた。誰がやったかは——

この状況からして訊くまでもあるまい。

「まさかここまでおやりになるとはね。呆れて言葉もありません」

新郎母が冷たく言いはなつ。

新婦母の顔が紅潮した。

「なにをそんな……聞いたふうな口を利かないでください。これはわたしと娘の問題です、他人がしやしやり出る幕じゃないわ」

「まだそんなことを言っているんですか。真結さんはね、今日をもつて息子と同じ姓になり、両実家から籍をはずれて別の新しい家庭を築くんですよ。もうあなたの所有物じゃあないんです」

それを、この期に及んでひどいことを——と、汚された白無垢を新郎母が広げてみせる。

「うちの子には、そんな華美な衣装、必要ありません」

新婦母は金切り声でわめいた。

「真結に贅沢を覚えさせるのはやめてちょうだい。我が家はあなたがたと違って、子供にあれもこれもと与えて媚びるようならしな

い家じゃないんです。なによ、知ったふうな顔をしてべらべらと。

うちの教育方針に文句を付けられるほど、あんたはお偉い親だつて言っの」

中庭に集められたサクラたちも、本物の親類らしき男女も、齋主さえもが呆然と新婦母の狂態を見つめていた。

——なんなのこの人、まともじゃないわ。

完全に吞まれ、咲希は一同の顔を見比べるしかできなかった。

新婦母が、とってつけたような笑顔で娘へ向きなおる。

「さあ真結ちゃん、帰りましょう。だからこんな結婚は反対だったのよ。あなたはね、お母さんの言うことを聞いてさえいればいいの。お母さんは、いつだってあなたのためを思っ……」

「——そうね、いつもそうだったよね」

真結が食いしばった歯の間から言った。

「子供の頃からずっとそう。『あなたのためを思っ、あなたのためを思っ』、そう言いながらお母さんはわたしの邪魔をしてきた。ねえ、どうしてわたしはピアノの発表会の前日、食中毒で入院したの。どうして高校受験の朝、お母さんは『電車で行く』って言うわたしを無理やり車に押しこめて、渋滞の道にはまって遅刻させたの。その前にネットで交通情報を念入りに調べていたのに、どうして」

「なにを言っているの、真結ちゃん」

新婦母が引き攣った笑みを浮かべる。

「いつまでもそうやって、昔のことばかりこだわって。あなたがそんなふう子供だから、お母さんはいつまでも心配なのよ。いい加減大人になりなさいな」

しかし真結は母の制止を無視して、

「それだけじゃないわ。はじめてお母さんの知らない友達ができたときも、はじめて男の子からメールをもらったときも、資格試験の朝も、いつだって妨害してきたよね。わたしがお母さんより幸せになるのが嫌なんでしょう。お母さんよりいい学校へ行くのも、お母さんより成功するのも、お母さんより素敵な人と結婚するのも、なにもかも我慢ならないんでしょう」

「な、……」

新婦母の顔から血の気が引いた。

真結が叫ぶ。

「だったら正直にそう言えればいいじゃない。いい母親ぶって、周囲も自分もだまして生きていくのはもうやめて。わたしは今日限りであなたと縁を切る。あとは好きナだけ、心置きなくわたしを罵倒しながら生きればいいわ」

そこまで言い終えると、顔を覆い、わっと彼女は泣きだした。

その肩をやさしく新郎母が抱く。ためらうことなく、真結はその胸へ顔を埋めた。留袖が涙と涙で濡れるのもかまわず、新郎母は彼女を強く抱きかえした。

新婦母は、愕然とした表情で二人を眺めた。

真結の父らしき礼装の男は一言も発することなく、うつすらと気弱な笑みを浮かべたまま、妻の数歩後ろに突っ立っている。

「真結ちゃん、戻ってきなさい！」

新婦母が絶叫した。

「わたしのたった一人の娘よ、愛してるのよ！」

「そう、愛しているんですよね」

疲れた声でそう言ったのは、紋付姿の新郎だった。

「——でもあなたは、娘さんを好きじゃない。愛してはいても、これっぽっちも好きじゃない」

新婦母が目に見えてひるんだ。

新郎はつづけた。

「好きではない子を育てるのは、さぞつらかったでしょう。心中お察しします。……でもご安心ください。これからはぼくたちが真結さんを引き受けます。ぼくが必ず幸せにしますから、あなたはもう御役御免です」

九月の庭園に、真結の低い啜り泣きが響いた。

新婦母は紙のように真っ白い顔をして、棒立ちのまま全身を震わせている。

だがいつしか咲希の目は彼らを通り越し、その背後へと釘づけになっていた。

——例の、名なしのウエイトレス。

彼女の頬はなぜか、新婦母と同じほど蒼白そうはくだった。

彼らのやりとりで心を奪われ、度を失っているのが傍目にもわかった。まっさらの、素の表情がそこにあった。

咲希は目を凝らした。

生まれてこのかた、視力は両目とも一・五から落ちたことがない。

人の顔を覚えるのもけして不得手ではない。

咲希がその目鼻立ちを網膜に焼きつけ終えると同時に、ウエイト

レスは狼狽ろうばいを顔に貼りつけたまま、小走りに中庭を去っていった。

10

——やっぱりこの『青扇殿』、おかしいわ。

最上階の四川料理店しせんで海鮮春巻、鶏とナッツの辛味炒め、激辛麻

婆井を胃に詰めこみながら、咲希は眉根を寄せた。

白無垢が用意してある控室はたいてい施錠されており、新婦の実母であっても自由に入りはできないはずだ。以前あった、映画『卒業』まがいの乱入その他だってそうだ。似たような手落ちが頻発するなんて、内部の人間が手引きしてわざと騒ぎを起こしているとしか思えない。

——でも、だとしたら誰が？

例の問題児プランナーの醍醐だいごリカ？ それともあのウエイトレ

ス？ どちらにしても、なんの目的で？

まさか崇りただじゃないわよね、と考えかけて咲希はかぶりを振った。有り得ない。馬鹿馬鹿しい。シロちゃんだって、幽霊なんてこの世にいないって言っていたじゃないの。

——でも、化粧室で見たあの手。原因不明の頭痛と不快感。

あらためて咲希は首を振った。

米粒ひとつ余さず井をきれいにし、ナプキンで口を拭ぬぐう。

百合香は人と会う約束があるとかで帰ってしまったため、咲希は四人掛けのテーブルに一人だった。斜め前の席に座った男が、彼女の豪快な食べっぷりを目をまるくして眺めている。

——ひとまず崇りの可能性は除外するとしましょう。

だとすると誰かが、青扇殿の評判を落とそうと画策している線が濃厚だろう。

商売敵がたきかもしれない。はたまたこの会館に恨みがある者かもしれない。いや会館そのものでなく、経営者や社員たちに遺恨を抱く者という可能性もある。

たとえば過去に青扇殿で挙式したカップルが、会場の不手際によって破談になり一生その傷を引きずっている、なんてケースだっただけ有り得る。

青扇殿で挙式した新郎新婦といえは膨大な数にのぼるはずだ。そ

れでなくとも冠婚葬祭は悲喜こもごもである。とくに結婚式となれば一生に一度の祭事と言える。破談までいかずとも、何年も瑕疵かしを引きずりつづけている夫婦がいるのはおかしくない。

「となると容疑者は、一人や二人じゃないよねえ……」

デザートの胡麻団子をたいたらげ、咲希は精算して店を出た。

腹ごなしに、エレベータではなく階段で一階まで下りる。

ヒールで階段を使うと、ふくらはぎにかかる負荷が心地よかった。毎日の筋トレを欠かさないとはいえ、やはり学生の頃に比べれば格段に運動不足である。

やつぱりシロちゃんと一緒にサークルで体動かしたいなあ、とぼやくつつ、咲希はロビーへと下りた。

もうすこし歩きまわろうか——。と角を曲がりかけ、咲希はふと足を止めた。

百合香がいた。

観葉植物の鉢の脇で、誰かと立ち話をしている。

肩下十センチのつややかな黒髪。シンプルなAラインの、シャンパングリーンドレス。

後ろ姿だけでも、かもしだす空気でたぐいまれな美女だとわかる。まぎれもなく、澤石百合香その人であった。

「百合——……」

声をかけようとして、咲希は息を呑んだ。

百合香の話し相手の顔が見えたからだ。

髪を頭頂部でお団子に結び、化粧気のない頬で縁なしの眼鏡をかけている。着飾った百合香とは正反対に、Tシャツとチノパンツというラフな格好の女だった。

でもあの顔から眼鏡をはずして、きちんとメイクさせたなら。

——間違いない。あの名なしのウエイトレスだ。

咲希はエレベーター前の柱の陰へ隠れた。

どうして彼女が百合香と。しかもあんなに親密そうに。

あの二人は知人だったのだろうか。だとしたならどうい関係だろう。そして百合香はどうして、わたしに「青扇殿で働いている知りあいがいるの」と一度たりとも告げなかったのか。

百合香がウエイトレスの肩をかるく叩くのが見えた。いかにも親しげな仕草だ。顔を寄せ、なにごとかささやく。

ウエイトレスは顔をくしゃっとさせてうなずいた。次いで観葉植物の葉陰から首を伸ばし、向こうの様子をうかがう。

——なんだろう。

ウエイトレスの視線の先にはティールラウンジがあり、なごやかに談笑する人びとがいた。

咲希は目を細めた。自慢の視力にものを言わせ、凝視した。

客の半分以上は礼服もしくは正装だ。そうでなくとも一様に身なりはいい。ジュース一杯で千二百円とるだけあって、学生や普段着の親子連れなどは皆無に近い。

ウエイトレスの目は、窓際の席に着いた客に向かっていた。

女だ。きつちりとスーツを着ている。体型や髪型からして若くはない。その堂々たるたたずまいに、確かに見覚えがある。

——宝田美香子。
たからだ みかこ

この青扇殿の現経営者である女性だ。

ウエイトレスはしばし美香子の横顔に見入っていた。だが百合香にうながされ、しぶしぶといったふうにもその場を離れていった。

百合香とウエイトレスが、肩を並べて会館を出ていく。咲希は柱に貼りついて二人をやり過ごした。

数秒、咲希は百合香たちを尾行すべきか迷った。

出口とティーラウンジとを見比べる。

迷った末、咲希はティーラウンジを選んだ。

案内のウエイターに「日焼けしたくないから、窓際の席はちょっと」と断り、誘導を繰り返して美香子の隣のテーブルへと着く。近くてかまわない。どうせ向こうは咲希の顔など知りほしくない。

メニューを広げながら、咲希は美香子の連れをさりげなく観察した。

こちらも見覚えのある顔だ。

確かそう、『月刊シテイスケープ』でインタビューをとめていた関谷せきやとかいう女性である。歳の頃は四十なかばだろうか、きりつとしたショートカットで、メンズのごつい腕時計とパンツスーツがよく似合っている。

美香子は顔をしかめて言った。

「……醍醐さんには、ほとほと困ってるのよ」

——醍醐リカのことだ。

咲希は耳をそばだてた。

「一昔前ならあの手の人は即辞めさせたものだけど、最近は労基署がうるさくてね。おまけに人事の話じゃ、面倒くさいしがらみ付きと来てる。頭が痛いわ」

「失礼ですが、プランナー以外の部署にまわすのは不可能なんですか」

関谷が問う。

美香子は眉間を揉んで、

「プランナーとして雇用契約書を交わしているから駄目なのよ。いまはサブプランナー扱いで組ませて仕事させているけど、文句たらたら。ほんとうに扱いにくい人だわ」

繊細な蔓草つみくせ模様のカップを、やや乱暴に置く。

関谷が尋ねた。

「そういえば例の、披露宴中に昏倒こんとうなさった御新婦はどうされましたか？」

「まだ昏睡状態のままよ。発端は十中八九、醍醐さん主導のサプライズとやらでしょうね。でも彼女自身は否定していて埒らちがあかないの。飯塚様の御親族が乱入した男性にのみ怒っていて、うちを訴える気がないのは不幸中のさいわいだけれど——肝心の本人が目覚めないことには、お見舞金の交渉もできなくて」

「ですよね。お気の毒に」

誰に対しての「お気の毒」なのかしらと訝りつつ、咲希はウエイターにコーヒーを頼んだ。さすがにもう食欲はない。

美香子は肘掛にもたれて、

「ねえ関谷さん、あなたは『オフレコで』と言えば守ってくださいる方だから、信用して愚痴りますけれど」

と切り出した。

「——青扇うち殿の一階の化粧室に、自殺した花嫁の幽霊が出るとい噂はご存知？」

「は？」

関谷が目をまるくした。

咲希は無意識に体を窓側へ傾けた。関谷が戸惑ったように言う。

「……そんな噂が、おありになるんですか？」

「ええ。しかも困ったことに、けっこう根強いよ。二十五年ほど前に、奥の個室で手首を切った上、首吊りをした花嫁がいたそうだね。親に強要された結婚への抗議だったらしいの。でもその頃、この会館の経営者はわたしでなく前夫だったわ。わたしが継いだときには、すでに噂話を超えて伝説級の怪談になっていてね」

「はあ」

関谷は困惑顔を隠さない。美香子が苦笑して、

「馬鹿げた話と思うわよね。でも……近ごろその怪談騒ぎが、また会館内で再燃しているのよ」

「再燃？」

「ええ、一階の化粧室に入ると変な音が聞こえるのだ、気分が悪くなる人がいるんですって」

咲希はぎくりとした。

なんてことだ。じゃあやつぱりあれは気のせいではなかったのか。わたしと同じ怖い思いをした人が、どうやら他にもいるらしい。

「その現象が、化粧室で自殺をはかった花嫁の怨念のせいだと？
でももう二十五年も経っているんでしょう。なぜ今になって？」

と関谷が眉根を寄せる。

美香子は首を振った。

「あくまで噂だけけれど、その花嫁を供養してくださった住職が、去年お亡くなりになったとかで」

「そのせいで霊が解き放たれたと？ まさか」

とってつけたように関谷が笑う。しかしその手は、左手首の腕時計を落ち着きなくいじっていた。

「万が一、万が一ですよ。もし幽霊がいたとしても、その子が青扇殿を恨むいわれはないでしょう。恨むとしたら無理に結婚させようとした親のほうでは？」

「と、わたしたち現世の人間は思うんだけどね」

美香子は苦虫を噛んだような顔で言った。

「残念ながら『祟り』というのは無差別なものなのよ。たとえば

平たいらのまさかど おんりよ 将門の怨霊は死後数百年にも及んだと言われているでしょう。

将門の首塚を壊して新庁舎を作ろうとした大蔵省では、当時十四人があいついで変死した。終戦直後にも、同じく首塚を取り壊そうと

したブルドーザが横転し、運転手が亡くなっているそうよ。菅原道すがわらのみち

真まねだつてそう。彼の死のあとに変死、疫病、天災があいついだ。仕方なく人びとは祟りをまぬがれるため、彼らを神として祀まつりはじめた。死の原因を作った者だけが、恨みの対象になるとは限らないのよ」

「おくわしいんですね」

関谷は気圧けおされているようだった。

美香子が咳払いせきばらする。

「祖父の受け売りよ。前も言ったかもしれないけど、商売人らしく妙げんなところで験げんかつぎする人だったから」

苦笑して、彼女はカップに口を付けた。

「幽霊騒ぎに、クレームだらけの従業員に、縁故社員を切れない役立たずの経営者……か。祖父と娘のためにと、慣れないなりに頑張ってきたつもりでしたけどね。この青扇殿も、そろそろ潮時ってことかしらねえ」

第四章

1

「——と、いうわけなのよ」

史郎しろうの部屋で彼と額を突き合わせながら、咲希はそう締めくくった。

彼は重々しくうなずいて、

「ひとまずは、あらためてわかった。……まったくもっておまえが首を突っ込むたぐいの話ではないことが」

「身もふたもないコメントはやめて」

「真実だろうが」

「だからこそ聞きたくない。そんなこと言われなくてもわかっているもん」

咲希はフローリングの床を拳で叩いた。史郎が顔をしかめる。

「やめろ、一階に響く。おまえな、『好奇心、猫を殺す』ってことわざ知ってるか」

「わたし猫じゃないし」

「さっきの台詞、そっくり返すぞ。そんなこと言われなくてもわか

つてる」

史郎はため息をついて、

「ともかく幽霊騒ぎとやらは気にしなくていい。確か例の化粧室に入ったら、吐き気と頭痛がしたんだったか？ そんなもんは人為的に起こせるんだから、べつだんたいしたこっちゃない」

「人為的に？」

咲希は身を乗りだした。

「え？ それどういうこと。どうやって？」

「たとえばこれだ」

史郎がスマートフォンを操作して、咲希の膝前へと伏せる。

数秒置いて、咲希は顔をしかめた。なんだろう、急に気分が悪く なってきた。なんだか落ち着かない。ざわざわする。

咲希は耳を押さえた。

鼓膜の奥に耳鳴りが居座っている。それから、こめかみのあたりに刺さるような不快感。いやだ。気持ち悪い。音とは言えない音が、やけに神経に障る――。

ふいにスマートフォンを取りあげ、史郎が画面をタップした。

途端、耳鳴りがかき消えた。

咲希が目をはちくりさせる。

「モスキート音アプリってやつだ」

史郎が言った。

「二十代後半以上の人間には聞こえない超高周波だよ。公園や駐車場にたむろしたり、長居して騒ぐ学生を追い出すために、商店が設置するセキュリティシステムの一種らしい。長時間聞きつづけると頭痛や嘔吐感を覚えるそうだ。聴覚が敏感なら、一分足らずで気分が悪くなるだろうな」

「それを青扇殿側が流してたつていうの？ 化粧室の利用者を追いだすために？」

喫茶店やコンビニならまだしも、お客の回転速度を重視しない式場でなぜそんな。咲希は首をかしげた。

史郎が首を振る。

「青扇殿がそんな真似したつてなんの得もないだろうよ。奥の個室に隠れてたやつ目的はわからんが、関係者ではないはずだ。おまえは足が見えなかったと言うが、洋式なら蓋ふたを閉めて上に載つてりやいいだけだからな。小柄で痩せ型の女なら座りかたを工夫して、荷重を蓋全体にかければそう割れるもんじゃない」

「じゃああの悲鳴は？ 息づかいは？」

「それもアプリを流したやつの仕業だろ」

「でもあんなとこに隠れて、なにをしてたのかしら」

「そこまでは知らん。でもおまえが邪魔で、早く出て行って欲しか

ったんだろうさ」

史郎は手もとの急須で、湯呑へお茶を注ぎ足した。

「ともあれ、よけいなことにかかわるなよ。老舗しにせの会館が妙ないやがらせで傾くかもしれないってのは、確かに地元民にとっちゃ寂しい話だ。だが関係ないおれたちが、わざわざ深入りすることじゃない」

「でも、長年の夢が——……」

「夢？」

聞きかえされ、慌てて咲希はうつむいた。

まさか本人の前で、「あなたと青扇殿で式を挙げるのが、子供の頃からの夢なの」とは言えない。

あまつさえ「紅葉の時期に白無垢を着てみんなにブライズメイドしてもらってフォトムービー等を流してもらって、あなたにあらゆるバージョンのタキシードや袴を着させて写真を永久保存版にして、その後は暇さえあればにやにや眺めよう」となどは言えるはずもない。

「あ、もうこんな時間」

咲希はとってつけたように壁の時計を見あげ、

「ごめんね。そういえば今日はおじいちゃんの七回忌で、本家の伯父さん家に行かなきゃいけないんだった。じゃあね」

とまくしたてて立ちあがった。

ちなみに祖父の七回忌云々うんぬんは嘘ではない。ただ出発までに、ほんとうならあと二時間ほど猶予ゆうよがあるだけだ。帰って妹とテレビでも観ていれば、すぐに過ぎ去る程度の時間である。

「話聞いてくれてありがとう、またねっ」

まだなにか言いたげな史郎を置いて、咲希は彼の部屋から逃げだした。

2

七回忌はいたって淡々とおこなわれた。

もともと祖父は享年きやうねん八十九の大往生であつたし、これほど時が経てばいまさら大きな悲しみの波もない。

本家の仏壇の前で僧侶にお経をあげてもらい、御布施と御車代を渡して見送りを済ませれば、あとは身内同士で出前の寿司をつまむだけだった。

「香耶ちゃん、今年で大学生になったんろ。ほれほれ、一杯いけや」
ビール瓶片手に伯父が妹へせまる。急いで咲希は割って入り、香耶の盾たてになってコップを差しだした。

「駄目ですよ伯父さん。うちの香耶ちゃんはまだ未成年ですから」

「そんげ固えこと言うなて。大学生にもなったら普通はもう解禁でねっか。運転するわけじゃあんめえし、無礼講無礼講」

「駄目だめだつてば。ほら、わたしが代わりに飲むからさ」

「んー、咲希ちゃんは強いのがわかってるすけ、面白おもえぐねえんだよなあ」

伯父が口をとがらせながらも、ビール瓶を咲希のコップへ傾けてくる。

注つがれたビールを咲希が景気よく呷ってみせると、伯父は満面の笑みで「おー、男前男前」と手を叩いた。なんのかのとうるさくはあるが、この手の陽気な酔っぱらいは扱いやすくて楽だ。

——対処に困るのは、もっと陰性の。

とひとりごちたとき、まさに脳裏へ思い浮かべたその人の声がした。

「だすけねえ……そんげ事がんばつか言われても困るんさ……、うちにも事情もんがあんだつけ……そうなんさ、みんななーんもわがってねえ。ほんにうちの子にばつか、いいの悪いのって押か付けてきて、ほとほと嫌いやなる……」

藪蛇やぶへびになるのを避けようと、咲希は顔は向けずに目線だけで声の主をうかがった。ビール瓶を持った伯父も、おっかなそうに首をすくめている。

「やーいや。まあた典子のりこさんの、例の愚痴愚痴がはじまったて」

「例のって……なに、典子伯母さんまたやらかしたの？」

伯父に合わせて咲希は声をひそめた。

彼が片目をつぶって、

「久典ひさのりちゃん、今年も見合いの連敗記録を堂々の更新中さあ。断つ

てきた相手の家へまた典子さんが怒鳴りこんでな、なんでも警察沙汰
汰んなりかけたってよ」

「うわ……」

咲希は瞑目めいもくした。

典子伯母とは、父の次兄の妻である。いまも親戚の女衆を捕まえては座敷の隅で延々と愚痴りつづけ、一同を辟易へきえきとさせている女だ。

そして久典は、その次兄夫婦の一粒種であり長男坊である。典子伯母が目に入れても痛くないほど可愛がっている息子で、

「なーしていつもこう、うちのボクちゃんは女運がねえんろ。やさしいし真面目だし、見てのとおり可愛い顔してらってがに、いまだきのおなごは我儘わがままで贅沢ぜいたくばっか言って、ああ、ほんに小づまらねえ世の中だあ……」

この母親の言葉どおり、四十過ぎても「ボクちゃん」と呼ばれてくる。

そして当のボクちゃんといえば母親——つまり典子伯母に寄り

添うようにして、蒸し海老えびの握りをしきりにコーラで流しこんでいた。

肩書きは市職員で勤続二十年近くになるはずだ。だがどこの課にいてなにをしているのか、把握している親類は少ない。久典自身がまるで口をきかないせいと、典子伯母の話が要領を得ないせいだった。

ともあれ絶えず縁談が舞いこむあたり、公務員であるのは間違いないらしい。しかし咲希が知っているだけで、少なくとも三十回は連敗している。

典子伯母いわく、

「まず子供がばんばん産める若い女でねえと。十代後半から二十代前半、意見を言わない従順な子。茶髪は駄目、ジーンズ駄目、化粧も駄目。四大卒も生意気だから駄目。異性と交際歴がある子は論外。

ボクちゃんを立て、敬い、三歩後ろをつけて歩くような子。もちろん結婚したら即、うちの実家で同居。結納金？　はん、もらってもらう立場で、そんげあつかましい事言うおなごはこっちから願わさげ」

なのだそうだ。

余談だが咲希は中学高校時代の六年間、この母子に「うちの嫁にもらってやってもいい」と粘着されつづけた。

ただし咲希が彼らの忌み嫌う「四大」に合格したこと、髪を明るめに染めたこと、酒を飲むようになったことで、いまは完全にターゲットから外れている。

次いで妹の香耶が標的にされたものの、咲希の強固なガードと、香耶自身が地元国立大にストレート入学したおかげで、現在は姉妹ともに無視されていた。

「まあまあ。あの、あれだ。いまどきは親の決めた結婚なんて流行らねえさ」

見かねた伯父が、典子伯母をなだめにかかった。

「なんと言っても、久典ちゃんが気に入ったおなごと一緒にいるんが一番さ。そこが話の肝心かなめってもんだ、な？ 久典ちゃん」

しかし久典は、

「ぼく、そういうことは母に一任していますから」と取りつくしまもなかった。

さすがに鼻白んだ伯父に、

「ほれ。ボクちゃんもそう言ってるねっか」

典子伯母が得意げに顎をそらす。

「あたしはね、おかしげな女にくれてやるために、ボクちゃんを手塩にかけて育てたわけでねえんさ。ほんとなら誰にも譲りたくはねえども、まあ、あたしも歳らすけね。あたしと同じくれえボクちゃ

んを大事にして、ボクちゃんにお仕えする嫁っこなら涙を飲んであとを任せようと思ってるんさ」

隣で香耶が目くばせしてきた。

「台所を手伝ってきまーす」

と周りに一声かけて、姉妹で座敷から退散する。

台所に引っ込むやいなや、香耶が吐き捨てるように言った。

「キモっ！」

いち早く避難済みだった母が「どうどう」と香耶をなだめて、

「ああいう人って息子が人生のすべてで、息子が擬似恋人なのよね」とため息まじりにつぶやく。

「娘しかいない我が家には無縁な感覚だけどねえ。でも典子さんにしてみたら、家に居つかない旦那の代わりに息子を愛するしかないんでしようよ。仕事と浮気に精を出して家庭を無視しつづけたお義兄^いさんを思うと、典子さんが心の支えを欲しがったのもわからないではないわ」

「だからって、あれはないわよ」

香耶が辛辣^{しんらつ}に言った。

「同情の余地があるのは否定しないけど、息子が恋人だの夫の代わりだのは問答無用で気持ち悪い。まさか実の息子相手に、恋愛感情を抱いてるわけじゃないわよね」

「そこまではないでしょ。あくまで擬似よ。擬似恋人」

母が苦笑した。

「マザコン家庭って、母と息子だけが問題だと思われがちだけどね。実際は“父の不在”のほうが重要なファクターだったりするのよ。仲良しな両親を持つ息子って、母親思いになることはあっても、べつたりなマザコンにはならないものよ。母親が夫への失望とか孤独感とか、女として満たされない思いを、一番身近にいる異性で分身でもある息子にどーっと注いじやうから歪みが出るのよね。結果、
“母親なしじゃられない、いつまでも母に寄りかかってなきやいられない息子”が出来上がっちゃう。でもママ側にしたらそれで本望というか、本懐なわけよ」

「つまりお母さんの意見だと、息子は毒母の完全なる被害者なのね」
香耶が肩をすくめる。

「けど二十歳過ぎたら必ずしもそうとは言えないと思うなあ。四十にもなってアレな久典さんは、やっぱりある程度自己責任ありよ。どっかで目覚めるチャンスは、いくらでもあったはずでしょう」
「ま、その意見は否定しない。でもみんながみんな、親を振りきって生きていけるほど強くはないからね。お母さんから見たら、やっぱり久典ちゃんはお気の毒よ」

母の声をかたわらに聞きながら、咲希は廊下に半身を乗りだすよ

うにして座敷をうかがった。

典子伯母が甲斐甲斐しく一人息子の世話を焼く姿が見える。口もとをハンカチで拭いてやり、

「なに、海老がもつと食べてえんかね？」

「向こうの寿司桶から持ってこよつか？」

としきりに機嫌をとっている。

——両親だって七十近いんです。介護問題もありますし、それより一番不安なのは、自分自身の老後です。

——孤独死だけは避けたいんですよ。

以前聞いた、井波の言葉が脳裏によみがえる。

井波はけして悪人ではない。いやむしろ、いい人の部類だと思う。

でもこの台詞の根底には、どこか典子伯母の感覚と似かよったものがある。彼の言葉を聞いたときにも感じたもやもやが、はつきりと形をとりつつある。

——お嫁さんは魔法のアイテムじゃないよ。

咲希は胸中でつぶやいた。

結婚さえできたなら、たちどころに介護も老後問題もひとりでも解決するなんてことはないよ。お嫁さんは「典子伯母のスペアになる若い母親」なんかじゃなく、あくまで一個の人間だよ。女が旦那さんの両親の介護に身をすり減らしたり、旦那さんのために尽くし

たり——それができるのは、愛情あつてこそだよ。

そして自分を一人の人間として認めてくれない相手や話し合ひのできない相手を、女が愛しつづけられる可能性はきわめて低い。

確かに井波の言うとおり「収入の低いギャンブル好きのろくでなしに、尽くすタイプのできた嫁さんがくつついている」事例は間々ある。

けれどそんな男性は、すくなくとも女と恋愛関係を築いている。それだけのコミュニケーションを二人の間に成立させてきている。

もちろん歪ゆがんだ関係ではある。女が自分自身の描いた幻まぼろしに恋しているパターン。悲劇のヒロインな自分に酔っているパターン。だが恋愛感情がそこにあるのだけは確かだ。「尽くす女」だって、あくまで感情に突き動かされている生身の人間なのだ。

それがわからぬまま、「魔法のアイテムが欲しい、欲しい」ばかり繰り返していても詮せん無いことだ。

とはいえこれは女にだって言えることである。

白馬に乗った王子様さえ迎えに来てくれれば、人生のすべてが好転すると信じている女。しかし迎えるための努力はなにもしない女。

自分を馬鹿にしたやつらを見返す妄想にばかり熱心で、行動ひとつ起こそうとはしない女。「いい男がない」とぼやいて、他人のせいにしてばかりの女。

そんな女だって、巷ちまたには山ほどいる。

——少なくともわたしはそうじゃない、と思いたいけれど。

なんだか自信が持てなくなってくる。足もとが揺らぐようだ。

結婚ってなんだろう。わたしがいままで結婚に抱いていた夢も、

しよせんは彼らの願望と五十歩百歩でしかないんじゃないだろうか。

咲希は額つこに掌てのひらをあて、柱にもたれかかった。

〈つづく〉